

二宮翁夜話

令和六年 第六回 7/10 (水) 資料

人の巻 (報徳の仕法)

第九篇 治國の要道

一九七 p.260 衰材復興は上役の徳行から

。村長の徳のある者は謙遜。名を誇らず。分限を守り

余財を推譲する。徳行

一九八 p.261 人の捨てるべき物を拾う

。荒地。借金の報着と暇つき。金持の驕奢。貧乏人の台情 等。

一九九 p.262 人の田の田の刈り蓋の損失は国家の恥に

。二宮翁の道は、荒地(土地の荒れ、草がふさふさ)を聞き、その務とせよといふ。

。人の捨てるべき物を拾い集めて民に与えん。人の恥に

二〇〇 p.263 その位でその道を行つ

。道の天下に行かぬことは難し。(才・力・徳・位)。人々か道をたずねる。国家は復興する

二〇一 p.264 人の心田の荒れと聞き

。一九九と酷似して、心田の開墾を力説して、二〇二 p.265 多人してのちよく得る

④ 大学 (經一章)

。知止而后有定。定而后能静。静而后能安。安而后能慮。慮而后能得。

二〇三 p265 仕法雛形は一切經

・日光帝神鈴の復興迄の取調帳(仕法雛形)數十卷

(三五) (國家復興の計算)

廿三 年算和尚(雪野山慈眼寺の住職) 尊徳と親交あり

・天地間の道理の因縁(一切經)

二〇四 p267 善行表彰と無利息金貸付

・村吏の復興には正直な者をとりよせよ (肝心)

・土地の開拓には肥え土を感得せよ

二〇五 p269 事をなすのは要悟(一) 信

・「寛則得衆、信則民任焉、敏則有功、公則説、

之を翁と少田宗の太夫保志長公(大學、孝行第二十)

・皇國は皇國の徳沢に開く道こそ

天照大神の足跡である、曲せ可宗への天降る

二〇六 p270 至誠、大根を太らる

・伊豆斐山の代官、江村太郎左衛門(担庵)の質問に

対して、「至誠を尽しむるなり」と答ふる

二〇七 p271 農民は士徳を離れざる

・越後の國の笠井龜威の考ふる方の問書に正す

二〇八 p273 敵をもつて徳を制す

・大岡の陣法「敵を以て敵を以て、敵をもつて敵を打つ

二〇九 p274 名を主権領の紛議を解決する(出訴をいふ)

二一〇 p277 陸島沼の干拓と埋立(一) 治の指導

二一一 p278 魚も酒も山に登る

・自分の職業をいふ、勉勵を以て食物を手にする

二一二 p278 好むことを後にする

・節りたる人の若者や、鬼事(精魂)に結婚は後にする、(宮内省の考を参考)